

『底が突き抜けた』時代の歩き方 524

「人間の尊厳」とはなにか - 映画『ミリオンダラー・ベイビー』

前号で映画『海を飛ぶ夢』について論じて以降、宮台真司が「尊厳死」に感じつづけていた「シコリ」が乗り移ったかのように、こちらにも「シコリ」が^{わだかま}蟠っている。映画の主人公ラモンがもしそれほど才能にあふれているわけでもなく、しかも肉体的苦痛に日々のたうち回っている末期患者であったなら、「シコリ」は感じなかっただろうか。感じなかったと思う。彼も辛い、側にいる者も辛く、双方が耐えられないという感情を共有することによって、たとえば映画で、主人公の世話を甲斐甲斐しく献身的に行っていた兄嫁が彼の自死に手を貸すことになったとしても、そこになんの異和感も生じるどころか、むしろもっと早く手を貸してやってもよかったのではない、という気持ちに観客も駆られると思われるからである。

映画の中の兄嫁は最も身近で世話しながらも、主人公の自死への思いを受けとめることができなかったから、彼の自死に積極的に手を貸すことにはためらいを持ちつづけていた。兄嫁には肉体的苦痛もなく末期患者でもない主人公が、自死を切々と訴えること自体が理解できなかったのである。つまり、寝たきり状態にあるからといって、彼が人間としての尊厳を損なわれているようには到底見えなかったし、彼ができるだけそう感じないような世話も続けてきたという思いもあった。「生から死へ、一線を越えたい

と言う彼のメッセージ」の中に、おずおずながらも踏み入っていくだけの衝動感が彼女のなかに生まれてこなかったのだ。自分のことを本当に愛しているなら、自分が望んでいることに手を貸してくれる筈だ、という主人公の主張に、だからといって反しているわけではない。彼女は主人公のことを本当に愛しているからこそ、自死に手を貸したくなかったのだ。

宮台真司も指摘するように、この映画は「尊厳死」に焦点を当てているわけではない。「尊厳死」を描きたければ、実在のラモンなどではなく、誰もが納得する肉体的苦痛に悶える末期患者に焦点を当てて、「なんのために生きているのか」を観客に反問させればよかったのだ。ラモンを取り上げたとき、監督の意図はたとえ周囲（観客）に理解されなくても、寝たきり病人が自死を強く望んだ場合、単なるわがままな自殺願望として無視すればよいのか、それとも身動きできない不自由さから募ってくる自死への願望に手を貸すことで、彼の最後の意志を受けとめるべきなのか、あるいは、判断保留の状態に委ねつづけるのか、といった択一的な難問の前に、主人公以外の登場人物や我々観客

を立たせることにあったと推測される。

自死直前のビデオ証言で主人公が、「私の人生は尊厳とは無縁でした」と告白するとき、「尊厳」とは一体なんであり、人生に「尊厳」は不可欠であるか、という疑問がどうしても湧き起こってくる。「尊厳」なき人生とは「自分らしく生きられない」人生である、と宮台真司は映画から受け取っている。しかし、「自分らしく生きられない」人生が「尊厳」なき人生であるなら、「自分らしく生きられる」人生にならないかぎり、人生に「尊厳」が戻ってこないことはいうまでもない。どう考えても、自死によって「尊厳」が回復されることはありえない。したがって、主人公は「私の人生は尊厳とは無縁でした」から自死を望むのではなく、「自分らしく生きられない」人生は自分にとって苦痛だから自死を望む、ということではならなかった筈だ。「尊厳」という言葉をもちだしたとき、問題は「自死を望む者の主観性」の領域へと移行せざるをえなかった。

もちろん、「自分らしく生きられない」人生に苦痛を感じるのも主観性の問題だが、他者の想像力は苦痛という感覚には向かいやすいが、「尊厳」という抽象的な言葉には向かいにくいという差異がある。だから、相手の「尊厳」を認めることは、「尊厳」を主張する相手の主観性を尊重することと同義になってしまう。そこで問題は「尊厳」ではなく、主観性ということになり、《そもそも主観性がそんなに重要か。人の尊厳は主観性に宿っているのか》という反問が、宮台真司から突き出されてくる。この反問は当然、「自分らしく生きられない」ことはそのことを否定（＝死）せざるをえなくなるほど、人生にとって決定的なことであるか、という問いを含んでいる。「自分らしく生きられない」という苦痛はなるほど、絶望に向かうだろう。だが、その絶望が寝たきりの主人公からまるで伝わってこないことが、周囲の誰もが彼の自死に手を貸すことを妨げていたのだ。

主人公が自死を強く望んでいることは明白であった。しかし、自分の手で死ぬことのできない彼の自死に積極的に手を貸すことのできる理由を、彼に接する誰もが欠いていた。彼の自死への思いはどうしても誰の心の中にも入り込めなかった。そこで持ちだされたのが「尊厳」という言葉であった。自分の寝たきり状態の苦痛をどこまで理解してくれるか、あるいは共感してくれるか、といった地平を「尊厳」の言葉で一気に飛び越えなくてはならなかった。理解されなくてもいいから、共感されなくてもいいから、相手が切に望んでいることを叶えてあげることが本当の愛ではないか、という殺し文句が彼の周囲に向けて発されることになった。この殺し文句に効き目がなければ、彼の自死は永遠に成就されなかった。この殺し文句に魅入られる者は一体、誰か、というのがこの映画の眼目でもあった。

主人公の自死に真っ向から反対する兄嫁や家族がその殺し文句にほとんど心を動かされなかったのは、長年の介護を通じて彼の自死に手を貸すことが本当の愛である筈がな

いという信念を一貫して崩すことがなかったからだ。女弁護士は自分の不治の病を彼の寝たきり状態と重ねて、心中を約束するほど彼の自死への思いに最も接近したが、夫に気づかれて彼の目の前から姿を消さざるをえなかった。残るのは、彼の自死を翻意させようとして無邪気に訪れた女工の口サだけであった。主人公によって手酷く反論された口サがそれでも諦めずに通いつづけたのは、彼女が主人公の意向に添うように努力していたからであり、したがって、殺し文句が彼女に浸透するのは時間の問題であったといえよう。殺し文句が彼女に結びついたとき、主人公の尊厳死の要求は彼の要求である死にたいという主観性を尊重することが尊厳に値するというように変わっていくのである。

映画は当然、自死の願いが叶った主人公を描写して終わるが、《そもそも主観性がそんなに重要か。人の尊厳は主観性に宿っているのか》という、宮台真司によって発された反問が残ったままであったように、主人公の自死に積極的に手を貸した口サにやがて襲いかかってくるにちがいない問題も残ったままであった。尊厳死であれ安楽死であれ、自死に赴く者の問題は自死に手を貸す者の問題でもあった。自死によって残された問題の一切は、自死に手を貸した生きている者が引き受けることを余儀なくされねばならなかった。つまり、自死に手を貸すことは、自死する者が残していく問題のすべてを引き受けることであった。自分の望みを真に叶えてくれる者のみが本当に自分を愛してくれる者だという主人公の主張は、自死によって惹き起こされるすべての問題を背負ってくれる者のみが本当に自分を愛してくれる者だ、ということだったのである。

寝たきり状態の主人公がベッドの上で煩悶しながら生きつづけていたとして、口サは彼のその煩悶を断ち切ってやるために、彼の死後、その煩悶を別のかたちでより一層大きく引き継ぐことになった筈だ。主人公が望むままに彼の自死に手を貸したことは果たして正しかったか、という問題が口サの人生に大きく申し掛かってくるのは避けられなかった。囑託殺人とどこがどう異なるのか、という疑念に囚われることになるのは目に見えていた。自死と共に自分の大きな「シコリ」を消し去っていく者は、関係者に拭い去れない大きな「シコリ」を残していくのである。宮台真司は自死への思いを翻意させようとして無邪気にやってきて、けんもほろろに跳ね返される口サの姿について、《哀れなるは口サなり》と形容していたが、本当に《哀れなるは口サなり》は主人公の死と共に映画の幕が閉じ、見えない描写の中に浮かび上がってくるにちがいない。

しかしながら、主人公の殺し文句に引き込まれて自死に手を貸した口サは、どう考えても彼女の器には収まりきれない人生の重荷を無理矢理背負い込まれたという印象を拭えない。主人公からすれば、自死に手を貸してくれる者なら誰でもよかっただろうが、自死に手を貸す側からすれば、自死を望む主人公への理解に踏み込みえない度合いだけ、言いかえると、中身を問わない主人公の主観性を尊重する度合いだけ、おそらく自死後に主人公の主観的な世界に自分が入り込めなかったことが、要するに、主人公の主観性

に關与していなかったことが、彼女を苦しめつづけるのは間違いない。クリント・イーストウッド監督の、去年のアカデミー賞の4部門（作品賞、監督賞、主演女優賞、助演男優賞）を受賞した『ミリオンダラー・ベイビー』は、映画『海を飛ぶ夢』が観客に残していった『シコリ』がどこに淵源しているか、を明らかにしているように思われる。

トレーラー育ちの不遇な人生から抜け出そうと、31歳のマギー（ヒラリー・スワンク）がロサンゼルスにやって来る。小さなボクシング・ジムを經營する名トレーナーのフランキー（クリント・イーストウッド）に、「家は貧乏。運動だけは得意。私、もう後がない。ボクシングを教えて」と弟子入りを必死に志願するが、フランキーは女性ボクサーは取らないとすげなく追いつ返す。31歳という年齢から、これが最後のチャンスだと知るマギーはウェイトレスの仕事をかけもちしながら、残りの時間をすべてボクシングの練習に費やす。ボクシングにすべてを賭けようとする彼女は、自分には失うものはなにもないと思っており、ボクシングで自分の命を燃焼させることを願っている。何の助言も受けられず、深夜までひとり黙々と練習を続ける彼女に雑用係のスクラップ（モーガン・フリーマン）が同情して、サンドバッグの叩き方のコツを教え、フランキーの使い古したスピードバッグを貸し出してやる。

フランキーはスクラップの好意で自分のスピードバッグを叩いているマギーを見て、「俺の道具を使っていると、俺がトレーナーだと人に誤解されかねない」と嫌味を言い、31歳の年齢と、一度も正規のトレーニングを受けていないことのマギーの急所を突き、「プロを育てるには4年必要だ。31歳でバレリーナを志すか？」と言葉のジャブを浴びせる。この毒を含んだ言葉に、マギーは唇を噛みしめてじっとこらえる。その姿にフランキーは、スピードバッグを取り返す気力をなくす。そんな彼らの関係に大きな変化が生じる。フランキーが育ててきたボクサーが彼の元を去ってからの初のタイトル・マッチに勝利して、世界チャンピオンになったことが発端である。そのボクサーはタイトル・マッチに「待った」をかけ続けるフランキーに忠実に従っていたが、栄光のチャンスを自分が逃していることに気づき、やり手マネージャーに引き抜かれて、タイトル・マッチを狙っていたのだ。

フランキーが彼の手で育てたボクサーのチャンスにあまりにも慎重すぎ、消極的にみえたのは、雑用係のスクラップのボクサー生命を自分が絶ってしまったという 負い目をずっと抱え込んできたからである。カットマン（止血係）としてスクラップの試合に付き添い、傷の手当てをしていたフランキーは、劣勢の試合だったがスクラップを奮い立たせ、戦わせ続けたために片方の目を失ったスクラップは引退を余儀なくされてしまったのだ。なぜ試合を止めなかったのか、なぜラウンドごとに止血し、むごい戦いを続けさせたのか、こう自問を何度も繰り返してきたフランキーは、トレーナーとなってジムを買い取り、「自分自身を守れ」をモットーに何人もの秀れたボクサーを育ててき

た。しかし、タイトル・マッチのような大試合につきものの再帰不能のリスクを、彼は自分の選手に冒させようとしなかったために、成功を求めるボクサーたちはみんな、彼の元を去って行くことになった。

フランキーが頑ななまでにマギーを拒絶しつづけていたのも、高齡と素人の彼女にケガをさせてスクラップのような二の舞を絶対避けたかったからだ。女のボクサーに対して罪の意識を感じることもしなくなかったのである。だが毎日毎日ジムにやって来て、他の若いボクサーたちがやっていることをすべて吸収しながら、自分のやろうとしていることだけに集中して練習するマギーを見守るスクラップは、「彼女には何かあると思うよ。やってみないか」とフランキーを突つき始める。先のボクサーのタイトル・マッチがテレビで放映された夜、彼の勝利に終わった試合後、チーズバーガーの差し入れを持ってスクラップの部屋を訪れたフランキーは、マギーがひとりジムに居残って、新品の自分のスピードバッグ相手に誕生日を祝っていることを聞き、彼女の様子を見に行く。「いくつになった？」とフランキーは訊き、マギーは「32歳」と答える。

フランキーから始めて話しかけられたマギーの口から、堰を切ったように言葉が溢れ出す。「また一年が過ぎたわ、13のときからウェイトレスをし続けてね。知ってる？

私の弟は刑務所。妹は不正に生活保護を受けている。父は死に、母は145キロのデブ。本当なら故郷へ帰って、中古トレーラーで暮らすべきなのよ。でもこれが楽しいの。年だなんて言わないで」

マギーの人生からボクシングを取り上げたら、彼女には何も残らないという事実、フランキーはそのとき気づく。「自分自身を守れ」とボクサーたちに口にしながら、彼自身を守っていた彼に、マギーは安全地帯から出てくることを強く迫っていたのだ。プロボクサーになることをけっしてあきらめないマギーは、ボクサーを訓練しながらも心の中で半ば引退していたフランキーの内心に再び火を灯そうとしていたのである。彼女の情熱には自分の情熱をもって応える以外に術はないことを覚った彼は、ちょっとばかり自分の正気を疑いながらも、彼女のトレーナーになることを引き受ける。「何も質問するな。泣き言は聞かん」というフランキーの言いつけに、マギーは彼を「ボス」と呼んで素直に従う。彼の指導のもと、試合に出られるまでに瞬く間に腕を上げていくが、最初からトレーナーになってもマネージメントはしないと決めていたフランキーは、マギーをなじみのマネージャーに紹介し、「あとは俺の知ったことじゃない」という態度を貫こうとする。

だがフランキーは、マギーの初試合を観に行かずにはいられない。彼女のマネージャーが別の試合を有利に組むために、マギーを強豪選手と対戦させているのを知った彼は、リング・サイドに駆け込んでマネージャーを追っ払い、自分がマギーのマネージャーだと名乗りを上げる。フランキーに見捨てられたと感じていたマギーは大喜びで、苦戦の

試合に臨む。「うまく相手を誘い込んで、 右から来る と思ったら、サッと体をかわし、フックで仕留めるんだ」というボスのアドバイスを胸に、リングに勢いよく飛び出して行ったマギーはそのラウンドで、見事なＫＯ勝ちを収める。その後も試合で連覇を重ねるが、どの試合も第一ラウンドの立ち上がりで相手をＫＯするという勝ちっぷりのために、どの挑戦者も尻込みをし、マギーの対戦相手を探すために、フランキーは相手のマネージャーに袖の下を払って、試合を組まなければならなくなってしまう。

やがてマギーはワン・ランク上の級へ進出し、最初の試合で鼻をへし折られる大苦戦を強いられるが、初戦をモノにして連続１２試合ＫＯ勝ちを収める。そんな彼女の元にＷＢＡウェルター級のタイトル・マッチや、英国チャンピオンからの試合のオファーが来るようになるが、しかし、フランキーにはそれに応じるリスクを負うだけの覚悟はない。ボクサーに対する彼の従来の消極的な態度だけではなく、幼くして亡くなった父親の面影をフランキーに見出して慕ってくるマギーに、彼のほうも自分の娘の姿を見出し、そんなマギーを過酷な試合で傷つけさせたくない親心も募りつつあった。映画では描かれていないが、自分の実の娘との親子関係を築きたいと望んでいるフランキーに対して、娘の方はそれを望んでいないらしく、彼が出した娘宛の受取人不明の「手紙の束」が積み上げられている。アイリッシュ・カトリックの彼は償いと救いを求めて教会にも通っているが、満たされない空洞を大きく抱え込んで日々を過ごしてきたのだ。

マギーに世界へ上り詰めるチャンスが訪れているのを前にして、フランキーは一歩足を踏み出せずに逡巡している。フランキーのいつもの消極的な態度を見て、マギーもそろそろフランキーの元を巣立つ潮時だと思ったスクラップは、彼女をフランキーが育てたボクサーを世界チャンピオンにしたやり手マネージャーに会わせることにする。だがマギーは出会い頭に、「私にはフランキーがいる。話しても時間のムダです」と先制パンチを食わせる。その直後、フランキーは英国チャンピオンとの試合を引き受けることにする。彼の心境の変化については描かれていないが、彼が娘に出した何百通目かの手紙がいつものように送り返されてくるなかで、彼があることを決心したのは間違いない。ともかくも、フランキーはマギーとふたりでイギリスに乗り込み、世界の一步に向けて挑戦する。

この試合でフランキーはゲール語で「モ・クシュラ」と縫い込んだ、アイルランドのナショナル・カラーとしての「アイリッシュ・グリーン（緑）」色のガウンを、マギーにプレゼントする。「モ・クシュラ」とは「私の血」とか「私の愛しい人」という意味で、フランキーがマギーを「モ・クシュラ」と名づけたとき、彼女を自分にとっての「新たな娘」として受け入れたのである。マギーとの関係を通じて彼は失った父親としての誇りを取り戻し、新たな人生の一步を踏み出す自分自身を確立させることを決意したのだ。マギーには「モ・クシュラ」の意味がさっぱりわからなかったが、それは会場のほ

とんどを占めるアイルランド人観客の心を捉えた。自分よりも若く、強く、経験豊富な相手に、果敢に立ち向かっていくマギーの姿に観客たちは熱狂し、会場には「モ・クシュラ！」の大声援が沸き上がる。それを背にして、マギーは英国チャンピオンに快勝する。

更に、その後のヨーロッパ転戦でもめざましい戦績を上げ、「モ・クシュラ」というマギーの新しい名前は、あまねくボクシング・ファンの間に知られるものとなっていく。彼らがアメリカに凱旋してまもなくのこと、フランキーのアドバイスに忠実に従ってきたマギーは、「小金が貯まったら家を買え」というフランキーの言葉どおり、母親のためにミズーリに小さな家を購入する。フランキーを連れて母に会いに行ったマギーは、母と妹を新しい家に案内し、誇らしげに鍵を手渡す。だが母親からは予想した反応は返ってこず、そこに感動的な光景は見られなかった。「家ではなく、金をくれればよかったのに」という言葉が口を吐いて出て、嬉しそうな顔を見せない母親の姿に、マギーは自分が本当に望んでいた家族はどこにもないことを思い知らされる。

気まずい思いで辿る帰り道、マギーは「私には、もうあなたしかいない」とフランキーに言うと、「頼りにしていい、いいマネージャーが付くまではね」とフランキーが優しく返しながら、「俺にもお前しかいない」と心の中で呟いているのがみえている。マギーにとっても、フランキーにとっても、もはや本当の家族はお互いにしかありえないことがはっきりと確認されてくるなかで、いよいよ百万ドルのファイトマネーを賭けたタイトル・マッチの日がやって来る。対戦相手は汚い手を使うことで知られるドイツ人ボクサー、青い熊 ピリーで、会場はラスベガス。いつものように「モ・クシュラ」のコールが巻き起こるなか、グリーンのがウンをひるがえしてマギーが颯爽とリングに上がる。試合はマギーの優勢で進むが、ゴングの終了が鳴って自分のコーナーに戻ろうとしていたマギーは、卑劣な相手に背後からの一撃を受けて椅子に頭をぶつけ、脊髄を損傷して以後、現役が続行できない全身麻痺の体になってしまう。

スクラップにケガを負わせ、ボクサー生活から引退させてしまったことに対する長年の負い目意識からようやく脱出し、新たなトレーナー生活を築こうとしてマギーとの二人三脚に踏み出したにもかかわらず、スクラップのときを上回る致命的な損傷をマギーに負わせることになり、寝たきり生活に追いやってしまったのだ。フランキーが激しい後悔の念に突き上げられて、声も出ない状態に襲われていたのかどうかはわからない。しかし、相手の反則の多さに対してフランキーが「やり返せ」とマギーに促し、それに怒ったピリーが仕返ししたことが直接の原因であったから、自分の身を守れなかった自分が悪いと言うマギーに、フランキーは彼女を救えなかった自分にどうしても罪の意識を感じてやまない。

娘が買ってくれた家をお金に換えようとして母親がマギーの元を訪れ、全身麻痺となった娘の口にボールペンをくわえさせて、彼女に文書の署名をさせようとする場面が映

しだされる。マギーはそんな身になってまで母親から更に見捨てられようとしていたのだ。片足切断という事態に見舞われたマギーはフランキーの目をじっと見据えて、「死なせて」と懇願する。私は私のやるべきことはやったわ、だから「kills me」と訴えるマギーに、フランキーは苦悩する。実の娘との関係修復を勧められてもはぐらかし続け、その煮え切らなさにカトリック教会の司祭からミサに来ることを禁じられていた彼は、悩んだ挙げ句、教会を訪れて助けを乞うが、司祭の言葉は彼を救うことができず、彼は結局、自らの意志で最後の決断を下さざるをえなくなる。舌を噛み切って自殺まで行ったマギーを医師は救命しようとするが、フランキーは深夜に病室を訪れ、生命維持装置をはずしてアドレナリンの注射を打ち込む。それから彼は長年の友人であるスクラップになにも言い残さず、自分のジムから姿を消す。ラストは、マギーがかつて亡くなった父親と通ったというレストランに現れるフランキーが映しだされる。

映画の中でフランキーが、マギーの希望通り彼女を死なせる場面について、アンチ尊厳死の団体からの抗議が殺到し、その点で映画の評価が割れたらしい。フランキーがマギーの生命維持装置を外したのはもちろん、彼女が自死を訴えていたからである。彼が彼女の自死の希望を受け入れざるをえなかったのは、彼に彼女の訴えを拒む理由はなかったからだ。映画『海を飛ぶ夢』の主人公ラモンの自死を希望する理由についてよく理解できないままに、死にたいと願うラモンの主観性を尊重して、女工の口サが彼に自死に手を貸すという点が、『ミリオンダラー・ベイビー』と決定的に異なっていた。マギーの自死を希望する理由はわからないが、彼女の自死を願う主観性を尊重して、フランキーは生命維持装置を外したわけではなかった。彼にはマギーが自分に自死を懇願する理由は、十分すぎるほどわかっていたのである。彼自身、できることならマギーと自分が入れ替わってやりたいと思うほど、打ちのめされていたからだ。

『海を飛ぶ夢』のラモンにとって、自死に手を貸してくれる者であれば誰でもよかったし、けっして特定されていなかった。ラモンには自死に手を貸してくれる者こそが、自分を本当に愛してくれる者だ、という殺し文句で支援者を呼び寄せる以外に術はなかった。しかし、フランキーとマギーの関係は違う。彼らはマギーの世界チャンピオンという一つの夢にむかって、一緒に肩を組んで生きてきた者同士である。マギーが寝たきりになって夢が潰え去ったとき、それはマギーにとってだけでなく、フランキーにとっても夢が潰え去ってしまったのだ。マギーの寝たきり状態は、紛れもなくフランキーの心そのものであった。マギーがフランキーの目をじっと見詰めて、「kills me」と訴えるように訴えたとき、フランキーに言葉がなかったのは、彼女の自死に反対していたからではなく、逆に彼女の自死に手を貸すのは自分しかいないし、自分が引き受けなければならない行為であることが十分わかっていたからである。

『ミリオンダラー・ベイビー』ははたして、『海を飛ぶ夢』のように尊厳死をテーマに

した映画だろうか。そうではないと思う。人間の誇りや尊厳を描写していても、尊厳死を描写しているわけではなかった。人間の誇りや尊厳を保持できない生きかたをしられねばならなくなったとき、死は唯一の選択としてどうしてもやってくるのか、その協力者はどこからやってくるのか、という問題としてみれば、だが双方の映画は折り重なってしまう。『海を飛ぶ夢』の主人公ラモンが自死への思いの最大の理由として、「自分らしく生きられない＝尊厳がない」ことを挙げていたなら、マギーもまた、「自分らしく生きられない＝尊厳がない」ことが、自死の訴えの理由のなかに最大に含まれていたことは間違いない。しかしながら、同じ寝たきり状態であっても、ラモンとマギーは決定的に隔絶しているのが感じられる。その隔絶は各々の自死に手を貸す者の立場の隔絶としても浮かび上がってくる。

ラモンと彼の自死に手を貸すロサとの関係は、マギーとフランキーの関係とは全く異なっていた。ラモンにとってロサはあくまでも自死の協力者にすぎなかったのに対して、マギーとフランキーは実の父娘のように共に生きてきた関係であった。ラモンの事故にロサは無関係であったのに対して、マギーの脊髄損傷はフランキーと共に生きているなかで起こった出来事であった。ラモンは自死の協力者を探す必要があったが、マギーは探す必要がなかった。マギーの自死の協力者はフランキー以外に存在しなかった。フランキーの手でマギーが育てられてきたのであれば、その過程で起こった出来事がもたらすマギーの自死の訴えを、フランキーが受けとめねばならないのは当然のことであった。マギーが寝たきりの状態になってどこにも逃げ場がなくなってしまったのであれば、フランキーもまた、そんなマギーを受けとめる以外にどこにも逃げ場がなかった。

マギーの苦悩はフランキーの苦悩でもあった。だがラモンの苦悩は、ロサの苦悩にはならなかった。ロサ（と同様に観客も）はラモンの苦悩の外にいたが、マギーとフランキーは同じ苦悩でつながっていた。ロサと共に観客もラモンの苦悩の外に置かれていたが故に、「自分を愛する者のために生きねばならないのなら、自分は自分でなくなってしまう」というラモンの主張と、「自分が自分であるために死んでいいのなら、愛する者の存在は否定されてしまう」という周囲の主張との狭間で、観客はどうしてもシコリを感じないではいられなくなる。しかし、マギーとフランキーの結びつきを知る観客が、マギーの自死にシコリを感じることは少ないと推測される。なぜなら、マギーが自死を訴えずに寝たきり状態で生きつづけたとしても、マギーの人生がポキンと折れてしまったのをフランキーと共に観客もどこかで感じ取っているからだ。

ラモンにむかって、これまでと同じ寝たきり状態で生きつづけることもできるのではないかと、言うことがそれほど酷とは思われないところで観客は彼の自死にシコリを感じていた。逆にマギーにむかって、寝たきり状態になっても生きるべきだ、とか、寝たきり状態のなかでもう一度新たな生きがいを見出せ、と言うことが酷だと観客に受けと

められるなら、マギーの自死にシコリはほとんど発生しなかった。それはもちろん、マギーの自死の訴えに観客が感情移入しやすかったからである。というよりも、マギーがどのようにして生きてきて、その途上で全身麻痺になってしまったのかについて知っているからだ。ラモンのようにマギーの自死への訴えだけを知っているわけではないからである。あんなにいっぱい生きてきた彼女が自死を強く訴えるなら、誰が一体その訴えを退けることができるだろう、という気持ちが起こっても不自然ではない。

マギーは人生に絶望して、フランキーに自死を訴えたのではない。ボクシングで世界チャンピオンに昇りつめるその一歩手前で、奈落に突き落とされてしまったことの絶望と呪いに駆られて、自死を訴えたわけではなかった。自分としてできるだけことはやって生きてきたという誇りと、そのようにして自分が生きてこれたことへの感謝の念に包まれて、マギーはフランキーにむかって、自分をこれまで育ててきたようにして最後まで面倒を見てほしいと懇願していたのである。自分は寝たきり状態のいまも戦っているのだから、フランキー、あなたの役割はリングの中にタオルを投げ込むことでしょ、どうかその努めを果たしてちょうだい、と訴えていたのだ。そんな彼女の思いを察するなら、フランキーに彼女の願いを叶える以外のどんな方法が残されていただろう。映画は尊厳死という問題ではなく、のっぴきならない関係にまで追い込まれ、立たされてしまったとき、目を背けずに引き受けようとするなら、どうしてもそうせざるをえなくなってしまう、人間の永遠の哀しみのようなものがここに描写されているのである。

『ミリオンダラー・ベイビー』は、自分のジムから姿を消してしまったフランキーの行方を描かなかったけれども、観客にはどこで、どのようにして彼が苦悩しながら、さ迷っているのかがどうしても気になるように描かれている。『海を飛ぶ夢』でラモンの自死に手を貸した口サがその後、どこで、どのようにして生きているのか、に観客の想像力はほとんど向かうことはないだろうが、マギーは死んで、行きつく先ははっきりしたが、自分のジムにも帰らずにどこかで生きているだろうが故に、フランキーの後ろ姿が目には焼きついて離れないように観客には感じられる。『海を飛ぶ夢』のラモンの自死に感じるシコリは、『ミリオンダラー・ベイビー』ではマギーの自死にではなく、罪を背負って生きつづけるフランキーの苦悩の表情にこびりついているのだ。

生きるということは、モノを食ったり、風呂に入ったり、排便したり、髪をとかしたり、音楽を聴いたり、本を読んだり……といった具体的な日常の繰り返しの集積である。誰もが自分の手でそれらのことを行っているが、寝たきり状態になれば、それらのことが当然自分の手では行えなくなる。『海を飛ぶ夢』のラモンには、彼を世話してくれる献身的な兄嫁がいたし、彼を愛し、慰めてくれる女性たちが出入りしていた。だがマギーには、そんな家族も友人も存在しなかった。彼女がファイトマネーを貯めて買った家も「お金のほうがいい」と言い放ったり、その家を売るために全身麻痺の彼女の口にボ

ールペンをくわえさせて文書にサインさせようとする母親しかいなかった。そんな母親から離れて、彼女は独りで生きてきたのである。独りで生きるためにボクシングに打ち込み、自分の全生命を燃焼させようとしてきたのだ。そして、フランキーと出会ったのである。

マギーは自分の命を賭けたボクシングができなくなっただけでなく、自分の手で自分をケアすることまでできなくなってしまったのだ。フランキーにケアを頼んで生き長らえるのと、彼に生命維持装置をはずして自死するのと、どちらが自分にとって納得できることか、を彼女は考えたろうし、フランキーにとってどちらが引き受けるに値するかについても考えたにちがいない。生き長らえることによって充実していたボクシング生活への思い出に耽り、現在の寝たきり生活への呪詛^{じゅそ}が突き上がってくるような日々を過ごすことになる恐れも予測していたかもしれない。もし彼女があれこれ悩んだ挙句、自死を訴えたのではなく、彼女にとってそうするのが全く必然であり、極めて適切な方法であるようにして自死への訴えが起こってきたとすれば、いまの寝たきり生活をも「できるかぎりのことをして自分は精一杯生きてきた」という満足感が包み込んでいる状態からの自然な要請であったと捉えられる。

死に尊厳はない、尊厳は生にしかない、生きつづけることがすべてである、といった考えにマギーの自死はどこまで違背しているのだろうか。「尊厳は生にしかない」としても、そう受けとめるのは一体誰なのか。当事者がそう思っていなくても、「尊厳は生にしかない」といえるのだろうか。マギーのように誰のケアも受けられず、ただ口で呼吸しているだけの寝たきりの生活であっても、そこに尊厳はあるのだろうか。本人に全くそう感じられていないのに、あなたの寝たきり生活にも尊厳が垣間見られる、と断定するのは一体誰なのか。自死を訴えられたフランキーには、彼女の自死を撤回させるだけのものは自分のなかになかった。むしろ、彼の気持は彼女の自死の訴えを受け入れていたようにみえる。問題はカソリックであるフランキーがその教えに反して、実際に生命維持装置をはずすことができるかどうかにあった。だが彼がためらうなら、マギーは誰からも見捨てられてしまうことになる。

そう考えると、独りぼっちのマギーは自死をフランキーに受けとめられることによって、大きな安心感を得て旅立つことができたのかもしれない。彼女にとって自死を訴える相手が目の前にいて、その相手に自分が裏切られることなく受けとめられることが大切であったのかもしれない。彼女は旅立ったが、その行き先はフランキーの心の中であったにちがいない。彼の心の中に居場所を見出してもう一度生きようとした気がする。フランキーは自分の中に入り込んだマギーと共に生きていくことになったが、その重さによるめきながら、自分の帰るべき場所を求めてさ迷わねばならなくなってしまった。そう思われる。

2006年2月1日記